日本における男性看護師の歴史的変遷からみた今後の課題

星野広茂、佐藤信枝
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】近年、男性が看護界に進出しつつある。しかし、看護師全体から見ればまだ少数派である事も明瞭だと考える。また増加傾向になるにつれ、今まで潜在していた男性看護師ならではの臨床で経験する困難も増えるものだと推測できる。私は大学に入学し、実際に男性のマイノリティを実感したことから、何故看護師は男性が少ないのだろうと疑問に思った。そのため、現代の看護のあり方と歴史的背景や文献での考察から、どのように男性が進出し、現在の男性ならではの役割を獲得したのかを明らかにする。この研究を行うに当たって、看護という職業が女性に特定されたものでは無く、男性が進出する事によって多角的な視点から対象者を理解しケアの質はもとより生活の質を向上させると考える。

【方法】1. 研究デザイン：文献研究
2. 研究対象：医学中央雑誌 Web 版を使用し、期間は 2004～2018 年とし、原著論文のなかでキーワード「男性看護師」によって検索された文献を対象とした。

【結果】1. 歴史的背景について
1946 年に制定された日本国憲法において、婦人参政権が実現するとともに、女性の地位向上にとって、法制上の男女平等が明記された。その後、1948 年に制定された保健婦助産婦看護婦法（以下、保助看法）では、男性の看護人について「看護婦、准看護婦に関する規定を準用する」とされた。その後、1999 年に「男女共同参画社会」が公布された 3 年後に名称は保助看法の改正で「看護士」から「看護師」と改称され男女同一になった。また 1985 年「男女雇用機会均等法」が制定された 4 年後、男子学生の母性看護学実習は精神科実習に置き換えられていたが、男子学生も履修可能になるなどの変遷が見られた。
男性看護師数は 2006 年度 38,028 人（4.7%）から 2016 年度 84,193 人（7.3%）と 10 年間で 2 倍以上に増えている。
2. 男性看護師の現状
1）役割期待：男性看護師は男性役割に過度な期待を持たれた時に負担を感じていた。このような困難に対して男性看護師はポジティブな受け止め方を行い対応している事が分かった。
2）羞恥心を伴うケア：男性看護師は患者に羞恥を伴う看護ケアを断られた際にストレスを感じ、女性看護師にケアの交代を依頼していることが分かった。そのなかには、拒否をポジティブに受け止めようと工夫している人も見られた。
3）女性看護師との人間関係：コミュニケーションの難しさを感じている男性看護師は休憩場所や接し方の工夫を行っていたが、女性看護師との関係性で困ったことのない男性看護師は休憩時間を一緒に過ごしていた。

【考察】戦後、日本国憲法によって、男女平等を謳ったことが現在の男女雇用均等法や男女共同参画社会基本法案などの考え方の芽生えであると考える。その 2 年後、看護に関する法において初めて男女平等を示唆されている。日本国憲法の男女平等であるという社会の考え方が看護界に広まっていると推測できる。看護界では社会の動向にあわせるようにし、性差を無くそうとする働きが見られる。つまり、看護の歴史は日本社会の動きに合わせて変化していたと考えられる。男性看護師数においては、男女平等参画社会などの政策の影響が顕著に表れていると言える。しかし、全体でみると、男性の看護師は 2016 年で 7.3%と少数派である事は明瞭であり、未だ男女平等であるとは言い難い現状であると考える。役割期待については、「期待」や「信頼」など前向きな感情に置き換えて自己研鑽する事で、自身の成長にもつながり、また女性看護師の期待に沿える事ができ、良好な関係が築けると考える。少数派は集団内において目に付きやすい存在であり良くも悪くも目立ちやすい存在であると言える（上杉ら 2014）、少数派の行動があたかもその集団全体の特徴のように見なされる（松浦ら 2013）など先行文献から、一部男性看護師の悪いイメージが全体のイメージとして定着しやすい状況であると言える。このようなイメージの払拭には、豊富な知識や技術を持った男性看護師が、患者や女性看護師と多く関わる必要があると推測する。従って、男性看護師数が増加することで、経験豊富な男性看護師が増加し、質の高いケアが提供でき、社会全体に良いイメージ定着するものと考える。羞恥を伴うケアに関しては、女性看護師は男性看護師の羞恥心を伴うケアの負担を理解した上で、率先して負担の軽減を行う関わり方が求められる。そのためには、男性看護師が看護ケアの交代を気軽に頼めるような雰囲気・環境作りが大切であると考える。女性看護師との人間関係については、何気ない会話や時間を共有する事で女性看護師との関係性が構築できると考える。つまり、女性看護師とのコミュニケーションが苦手な人ほど、日頃から積極的に女性看護師とコミュニケーションを取る努力を行い、関係性を築く事が重要であると推測する。

【結論】
1. 看護界は未だに男女共同参画社会に至っていない。
2. 両性の特性を活かしつつ短所を補い合うことにより、看護という職業がより成熟したものになる。
3. 陽性的な考え方を身に付け自己研鑽する努力を行う。
4. 看護界の歴史は社会の動きに沿っている為、社会の動きを見ることは看護界の将来を見据えることに繋がる。